

目次

1. 本年度の編集責任者より
2. 事務局より
3. 運営・企画担当より
4. 今後の例会案内
5. 研究会のお知らせ
6. フランス語学が勉強できる大学院紹介
7. 若手研究者へのアドバイスコーナー

1. 本年度の編集責任者より

本年度は、編集責任者を私、赤羽研三が、副編集責任者を大久保伸子氏が務めます。

文学理論を専門とする者として、本学会に入会して丸4年、やっと語学会の全体が見えてきた、という状態で、編集責任者をお引き受けすることになりました。大丈夫だろうか、と心もとなく思っている会員のかたも少なくないと思いますし、私自身も不安ですが、皆様からのサポートをいただいて、なんとか無事責任を果たせればと思っています。

言語学の専門家ではない者として、とくに若い研究者の方々に対して、本学会について一言だけお話をさせていただきます。私は、文学や記号論、哲学、精神分析関係等の学会に所属していて、語学会に入って強い印象を受けました。まず、活動が活発です。しかも、派閥のようなものがなく、学問的には厳しいのに、アットホームな雰囲気、年齢とか立場の違いに関わらず自由に意見の交換ができます。このような学会は私の知っているかぎりあまり見当たりません。そのような点で、とても恵まれた環境にあるということです。

また、直観的なものに頼ることが多い文学研究に携わってきて、豊富な例を駆使して、着実に理論化する言語学の方法には私自身多くのことを学びました。ただ、分析は精緻になっていると思いますが、細かいことにこだわって少し視野が狭くなっているのではないかという気がします。言語は社会や身体と密接に関わっています。言語とは何かという問いをつねに念頭に置いて、他の分野にもインパクトを与えるような研究を望んでいます。

最後に、学会誌をよりよいものにするために、狭い枠にとらわれず、自由にアイデアを出していただけることを期待しています。

本年度は次の二人の方が編集委員を辞任されました。

青木三郎氏(筑波大学)

三藤博氏(大阪大学)

また、次の四人の方が新たに編集委員になられました。  
西村牧夫氏(西南学院大学)  
平塚徹氏(京都産業大学)  
山田博志氏(筑波大学)  
喜田浩平氏(慶応義塾大学)

(赤羽研三)

2. 事務局より

事務局のメールアドレスについて

事務局はもう一年、大阪大学言語文化部におかれませんが、言語文化部のネットワーク体制の変更により、事務局のメールアドレスが変更になりました。新しいアドレスは以下の通りです。ご注意ください。

flsアットマーク french.lang.osaka-u.ac.jp

ついでですが、同じく言語文化部でお世話している frenchling のアドレスも同じ理由で以下のように変更になりました。

f-lingアットマーク french.lang.osaka-u.ac.jp

学会費の納入について

学会費の納入には、以下の郵便振替口座をご利用下さい。

00160-6-56308 加入者名：日本フランス語学会

例会通知などについて

例会等の郵便による発送業務は、奥田智樹氏(名古屋大学)をお願いしていましたが、今年度から平塚徹氏が担当します。

なお、例会等の連絡が来ないという問い合わせが時ありますが、郵便による連絡は、春の仏文学会時の例会・シンポジウムを除き、原則として事務局に葉書を委託されている方のみに行っています。(それ以外の連絡が郵送で有るときは、あくまでも例外的なサービスです。)詳しくは、『フランス語学研究』の表紙裏の案内をご覧ください。(Y.H.)

3. 運営・企画担当より

運営・企画担当は通常の例会、特別例会、シンポジウムなどを企画しています。2002年度は前島、渡邊(関東)、大木、木内(関西)が担当です。

2001年度はシンポジウム「ことばと視点 - 日本文学の仏語訳をとおして」(6月2日、上智大学)が開催されました(『フランス語学研究』の「シンポジウム報告」を御覧下さい)。今年度は日本フランス語フランス

文学会春季大会において「言語とジェンダー：フランス語と日本語のばあい」のタイトルで開催されます（6月2日、14時10分～16時10分、東京外国語大学）。

その他の例会について、昨年度は『フランス語学研究』の「例会報告」を、本年6月以降に関しては次項を御覧下さい。

来年度も、通常の例会、シンポジウム、共通テーマによるミニ・コロック、海外の研究者を招いての特別発表などを開催する予定です。アイデアをお持ちの方は運営・企画担当にご連絡ください。会員の皆様の例会への積極的な参加をお願いします。（前島和也）

#### 4．今後の例会案内

本年度6月以降の例会は以下の予定で行います。発表題目などは変更されることもあります。学会ホームページ（URLは最後のページを御覧下さい）およびfrenchlingに最新情報が掲載されますので、御確認下さい。

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

##### 第201回例会

6月22日（土）15時 - 18時

早稲田大学文学部第7会議室（39号館第2研究棟6階）

森香奈絵「不定名詞句と否定」

大久保伸子「半過去」

##### 第202回例会

7月13日（土）15時 - 18時

早稲田大学文学部第7会議室（39号館第2研究棟6階）

ミニ・コロック＜日仏対照言語学の方法と実践＞

青木三郎、小熊和郎、前島和也

##### 第203回例会

9月28日（土）15時 - 18時

早稲田大学文学部第7会議室（39号館第2研究棟6階）

奥田智樹（発表題未定）

平塚 徹（発表題未定）

##### 第204回例会

10月19日（土）15時 - 18時

早稲田大学文学部（予定）

田中善英「複合時制について」（仮題）

発表者1名未定

##### 第205回例会

11月10日（日）14時 - 17時

京大会館

小田 涼「周知の指示形容詞」

山田博志

「フランス語におけるdepictive構文と二次的叙述」

##### 第206回例会

12月14日（土）15時 - 18時

早稲田大学文学部（予定）

塩田明子（発表題未定）

発表者1名未定

～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～ ～

例会発表希望者は、事務局（または編集委員、運営委員）を通じて、発表希望の3ヶ月前までにお申し込み下さい。（前島和也）

#### 5．研究会のお知らせ

「フランス言語学を一緒に勉強する会」

この勉強会は1993年に発足して以来、今年で10年目に入りました。元来、フランス語学に興味を持つ人たちが集まって情報を交換し合う、という目的で始まったものです。会の運営は発表形式を取っていますが、参加者から問題の設定のしかた、アプローチ、データの集め方や種類、ビブリオ、先行研究、理論的背景など頭に浮かぶことをどんなことでも、年齢や経験には関係なく自由に意見を言い合う伝統が根付いてきました。発表のどの時点でも質問でき、また出席者全員に必ず一度は発言してもらおう、というやり方も自由な雰囲気作りに一役買っていると思われます。もっとも会の後の懇親会はもっと貢献しているのかもしれませんが、

私たちは、勉強で大切なことは問題を自分のものにして、自分の発想で考えていくことだと思っています。お仕着せの理論をなぞってデータを集めて理論を証明する、という方法は個性を欠く危険が付きまといましますし、しばしばごく狭いサークルでしか通用しなくなります。そのような悪弊を避けるためには、自由と平等の精神の下に他人を、そして自分を信じる心を忘れないことが重要です。しかし先行研究を無視することは許されませんから、研究者の負担は大きくなります。

そこで、色々な経験を持つ人たちが集まって、情報を交換しあいながら勉強の場を構築していきたい、これがこの会の出発点であり、また目的でもあると思います。

発表は毎回1名で、3時間の持ち時間ですが、参加者からの質問や追加情報、異論などであつという間に時間が経ちます。発表会が目的ではないので、発表者が見つからないときは何かテキストを持ち寄って講読会にしても良い、などと思っているのですが、今までのところ、発表者が途絶えるようなことは起こっていません。ここで発表した後、もう一度今度は語学会例会で発表するというケースもまま見られます。

この会の活用のしかたは参加者によって異なると思いますが、大切なことはどのような発表からでも良いところを引き出し、評価し、それを自分の問題と結びつけて考えていくことで、これがこの会の恐らくは最

もオリジナルな長所だと思っています。

そのような活動は人的資源が重要であることは言うまでもありません。今回はこの会の発案者の一人である藤田知子さんのプロフィールを本人にお願いして書いていただきました。(川口順二)

私はもともと文学志望でしたが、フランス留学の前後からフランス語学に興味を持ちはじめ、それ以来ずっとフランス語学畑を歩いてきました。名詞限定を中心に、総称表現、名詞の「性」、トートロジー構文、そして、比較や程度の表現などについて、何回か発表したことがあります。ただ、歳を重ねるにつれて、狭い意味でのフランス語学に飽き足らなくなったのも事実です。言葉に関わるいろいろな問題意識を自分の目で見、自分なりの言葉で語りたくて強く願うようになりました。そのとき助けとなるのは、やはり自分が学んできたdisciplineとしてのフランス語学であることもわかってきました。日本フランス語学会は学閥、年齢、性別に関わらず、意欲と情熱がある人には、必ずチャンスが与えられる学会です。学会活動が活性化するには、その底辺にある小規模な研究会や勉強会の活動が欠かせません。萎縮せずに、どんなにつまらないと思われていることでも質問して議論し、とことん耳学問できる場として、勉強会が続いていくことを願っております。(藤田知子)

今年度は4月から次のような発表が行われ、または予定されています。

4月13日(土) 3時~6時、慶応大学(三田)

大学院棟4階347C教室

川島浩一郎(東京外語大学非常勤)

「Avecの一用法について」

5月18日(土) 3時~6時、慶応大学(三田)

安斎有紀(青山学院大学大学院)

「tu parles!, tu penses!などの表現について」

6月15日(土) 3時~6時、慶応大学(三田)

松田孝江(大妻女子大学)

「前置詞 en, à, dansについて」

7月6日(土) 3時~6時、慶応大学(三田)

芦野文武(慶応大学大学院)

「代名動詞の相互用法について」

この会で話して下さる方を募集しています。ご希望の方は世話人までご連絡下さい。またこの会で読み合わせをしたい本や論文、その他のご提案もぜひお寄せ下さい。なお、今年度から案内はメーリングリスト Frenchlingでのみ行い、郵送による通知は省かせていただきました。Frenchlingに加入しておられない方は、fujitaアットマークkanda.kuis.ac.jpまたはjnkawaアット

マークattglobal.netにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。

(世話人 藤田知子、川口順二)

#### 関西フランス語研究会

毎月1回、大阪日仏センターで、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。気楽な会ですので言語学に興味のある方でしたらどなたでもいらしてください。ここ1年では次のような発表がありました。

6月30日 武本雅嗣

「フランス語の à + NP およびその代名詞形と日本語の二格について - 非対格構文の日仏対照研究」

7月14日 松山紀子

「フランス語・日本語の断りの発話行為について」

9月29日 安達博明

Etude comparative des verbes *achever, finir et terminer*

10月20日 安西記世子

「oublierの複合過去」

12月22日 大久保朝憲

「緩叙法的否定と誇張法的否定」

1月26日 金子 真

「疑似関係節について」

2月23日 春木仁孝

「フランス語の複合過去について」

3月23日 山川清太郎

「Victor HUGOの語彙について-Lamartineの「瞑想詩集」とVictor HUGOの「静観詩集」との語彙比較を通して」

4月27日 森香奈絵

「フランス語の不定名詞句と否定」

研究会で発表を希望される方は木内までご連絡ください(関西の方に限らずどなたでもどうぞ)。

kinouchiアットマークpost01.osaka-gaidai.ac.jp

tel & fax 06-6203-5658

(木内良行)

#### 6. フランス語学が勉強できる大学院紹介

筑波大学大学院 人文社会科学部

現代文化・公共政策専攻

筑波大学では2000年度から2001年度にかけて大学院博士課程(5年一貫性)の改組再編が行われ、従来20あった研究科が6つの大研究科に再編されました。こ

の改組再編に伴い、新しい専攻も幾つか誕生しました。ここではその一つ「人文社会科学研究科、現代文化・公共政策専攻」について紹介します。

「現代文化・公共政策専攻」は「シビルソサイエティー」「グローバルガバナンス」「文化交流論」「情報伝達・メディア論」の4分野からなり、前2つは社会科学系の教員が、後の2つは現代語・現代文化学系の教員が主として担当しています。このうち「情報伝達・メディア論」には言語学関連の授業科目が用意されています。仏語学プロパーの教員は山田博志一人ですから、仏語仏文の良き伝統や雰囲気は、残念ながらありません。その反面、英独中韓の諸言語を専攻する、優秀な中堅若手のスタッフが揃っていますし、鷲尾龍一をはじめフランス語に関しても実質的な研究成果をあげている教員もいます。全員が自分の専攻語以外の言語にも関心を持ち、活発な交流が日常的に行われていることがその特徴といえるでしょう。多言語の比較対照研究には、方法論的にも実際的にも多くの問題が存在することも事実ですが、その有効性・生産性は私自身が日々実感しているところです。多少極端な言い方をすれば、フランス語と日本語だけを見ていたのでは、仏語学の分野でも十分な成果があげられない時代になりつつあるという気がしています。

このような特徴から明らかなように、伝統的な仏語学より、むしろ英米系の言語理論に関心を持ちフランス語を研究する、あるいはフランス語を研究対象の一つとする学生にとって最適な環境ではないかと思えます。研究対象となる言語は主に日中韓英仏独ですが、スウェーデン語、オランダ語、モンゴル語に関しても部分的には対応可能です。なお「情報伝達・メディア論分野」では、言語学的研究の他に、社会学的・書誌学的な情報メディア論の研究、及び英語教育学の研究も行われています。

「文化交流論分野」についても簡単に紹介しておきます。ここでは「現代文化の特性を、言語・芸術・科学等の基礎的問題に即して検証し、かつ、書記文化・身体文化・文化差異等の現象から動態的に把握することを目指す研究が行われ、英独仏の文学・思想を中心とする優秀なスタッフが集まっています。フランス関係は川那部保明（日仏文化対照論、ポエジー論）、廣瀬浩司（フランス現代思想、科学文化論）、慎改康之（フランス現代思想、認識論）の3名です。

詳しい授業内容等は「現代文化・公共政策専攻」のホームページをご覧ください。筑波大学のホームページ(<http://www.tsukuba.ac.jp>)から「教育関係の組織」、「大学院博士課程研究科」、「人文社会科学研究科」、「現代文化・公共政策専攻」とたどっていけば筑波大学の大学院の全体像がお分かりになると思います。入学試験は2月ですが、将来変更になる可能性もあります。なお修士号を持っている学生は3年次編入も可能です。

（山田博志）

## 7. 若手研究者へのアドバイスコーナー 文献収集の方法について

この記事は、研究テーマがきまったとき、どのようにして文献を探索し、集めてゆけばよいかということについて、ニューズレター編集担当からの依頼にもとづいてお話しさせていただき、大学院生など若い研究者（わたしも若いつもりですが）のかたがたの参考に供するものです。

### (1) 文献巻末の参考文献リストを活用する

自分のテーマにかんする文献をすでになにか見ているなら、その文献の末尾の参考文献リストを見て、そのなかから興味をもった文献をさがし、さらにその文献の参考文献を見るということをくりかえして、文献を集めてゆきます。

### (2) 書誌情報をみる

基礎的な文献を落とさないようにしたいものです。東京外国語大学グループ<セメイオン>(1998)『フランス語を考える』(三修社)の巻末に、領域ごとにわけられたくわしい文献案内がありますので、とくに自分にとってまったく新しいテーマにとりくもうというときは、まずはじめに見ておくことをおすすめします。

また、『フランス語学研究』各号の巻末には、「海外雑誌論文目録」がついています。この目録は、毎年12月下旬に、早稲田大学語学教育研究所、およびいくつかの大学図書館において、フランス語学会の会員が自発的に集まって、1年間にあらたに到着した雑誌に目を通し、共同作業で論文の題名を拾い集め、情報として蓄積しているもので、われわれの学会の研究熱心さの伝統を体現する資料でもあります。日本フランス語学会ホームページにも、「海外雑誌論文目録」のアーカイブが置いてあります。

フランス文学が主体で、語学に関してはあまり多くありませんが、『フランス文学研究文献要覧』(日外アソシエーツ)は年鑑形式で研究論文の索引として便利です。

### (3) コンピューターで検索する

各大学図書館は、OPAC (Online Public Access Catalog) をそなえています。まずは自分の属する大学の図書館のOPACにアクセスし、キーワードを打ちこんで検索すれば、タイトルにそのキーワードがふくまれる所蔵文献が一覧されます。

学術情報センターのWebCat (<http://webcat.nii.ac.jp/>)では、全国の大学図書館のOPACを一挙に検索できます。他大学にしか蔵書していない文献については、所属大学図書館のカウンターで複写依頼や現物貸借依頼を申しこむことができます。

国立国会図書館のNICHIGAI-Webデータベースは、国会図書館が収集する学術誌、大学紀要、専門誌を中

心とした記事索引で、キーワードを打ちこむと、タイトルにそのキーワードがふくまれる論文などが一覧されます。この検索システムは、大学ごとに契約して利用しているものですので、通常、学内からしか使えないようになっていっています。多くの場合、大学図書館の検索のページからリンクがはられていて、そこから入るとい形になっています。

(4) 雑誌のバックナンバーを通覧する

自分のテーマに関連する雑誌のバックナンバーをしらみつぶしに通覧しておくこともよいことです。思わぬ拾いものをする可能性がありますし、直接使える文献が見つからなかったとしても、その分野の研究動向をひろく知ることができ、勉強になります。

なお、(2) でふれた「海外雑誌論文目録」の収集作業に参加することも、同様の意味で勉強になります。興味のあるかたは、お近くの編集委員までお声をおかけください。  
(渡邊 淳也)

~~~~~

『文献案内』作成のすすめ

大学院にはいると、誰しも「どのように研究を進めていけばよいのか？」という悩みにとられることがあるでしょう。しかし、論文の提出期限などもあるので、いつも解決に時間をかけられるわけではありません。一石二鳥とまでは行きませんが、その処方箋として、『フランス語学基礎文献案内』をつくってみてはいかがでしょうか。

『文献案内』といっても、立派なものをつくる必要はありません。まず、各分野ごとに、重要だと思う文献をリストアップします。頻繁に参照したり、理論的基盤となるような著作はそう多くはないはずですが。文法書、統辞論、意味論など、一通りの分野をカバーするようにし、先生や先輩にも尋ねてみましょう。次に、各文献の出版年などを調べます。普段利用する図書館で手にとって確認し、図書整理番号も控えておきます。最後に、内容に関する簡単なコメントや目次の概略をつけます。『文献案内』が目標なので、正確に分かりやすく書いて下さい。

以上のデータを見やすく整理すれば完成です。書き方は、論文末尾の参考文献などを参考にして下さい。完成品は現時点の関心や知識を少なからず反映しているので、自分の現状を把握する手だてになると思います。ですから、文献の過不足や不適切なコメントなどに気づくことが大切です。もちろん、文献データを整理することによって、利用の仕方も効率的になるでしょう。調べ物をするときに重宝するほか、参考文献の基本データとしても利用できます。

私が先生に勧められて『案内』をつくったのは学部生の時だったので、その価値を実感したのは随分経ってからでした。単なる便利帳ではなく案内として、書き込みや修正を加えながらいまだに現役です。

~~~~~

インフォーマントの笑い

フランス人と話している時、自分が言ったことに対して急に相手が吹き出したり、にやけたりすることがあります。そんな時こちらとしてはまた何かしくじったなと心の中で舌打ちするのです。こんな経験は皆さんもあるのではないのでしょうか。パリ留学時代に授業を受けていたH先生は「インフォーマントの笑い」に注目するようにと、しばしばおっしゃっていました。はからずも変な表現を使ってしまいフランス人の友人がクスツとした時、または文法的には正しい言い回しを使っているのに爆笑された時、実はそれは重要な言語事実を示唆しているかもしれないということです。外国人がゆえの思いも掛けない奇妙な表現は、何か「通は言わないこと」や誰も想像もし得ないような「掟やぶりの用法」である場合が多いので、ネイティブの自然な笑いはインフォーマント用の作例テストが示すよりもはるかに正直に話者の反応を反映している可能性が高いのです。このような自分自身の「笑われ事例集」をつくってみると、その中から将来の論文のねたになるようなものがひょっとするとでてくるかもしれません。因みに、研究には全くむすびつきませんでした。自らの笑われ話をひとつ。パカンスの写真を友人に見せていたところ、誰もいない静かな海辺の写真を見てIl n'y a meme pas un chat. と言うので、実際にはのら犬がうろろろしていたことを教えてあげよう。Mais, il y avait des chiens partout! と反論すると、そこにいた人々は皆笑い始めたとき。ネイティブでない強みを大いに生かしましょう。  
(中尾和美)

~~~~~

フランス語の習得と留学

「フランス語を分析する力」と「フランス語力」は正比例するものではありませんが、フランス語ができるに越したことはないというのも、事実でしょう。このことを前提に、私のフランス語習得に関わる体験を留学のことと絡めて、少しお話しします。

フランス語圏への留学は、行く時期によってその性質が異なってくるように思えます。私の場合、初級文法を一通り終えた時点で1ヶ月ほどカナダに語学留学をし、大学院2年目の秋から1年、そして博士課程に入ってから3年半フランスへ留学しました。後のほうになればなるほど、フランス語習得の比重と効果は薄れてきて、研究目的というようになっていきます。研究のことだけを考えれば、それなりの研究をする段階になってから留学すればいいことになりませんが、私の中では、語学習得の意味でも留学は重要な経験でした。日本にいて勉強していたのでは、目にも耳にもすることのない生きたフランス語がたくさんあります。2度目の留学の際、お釣りを渡そうとしているカフェの店員にC'est bon, c'est bon.と言っている客を見たときの

「ショック」は今でも忘れられません。こういうc'est bonの使い方は、「教わって」こなかったのです。こういった「ショック」は、早いうちにたくさん受けた方がいいのではないのでしょうか。

もうひとつ、これは、私が後悔していることですが、大学院に入ってから留学では、私は、一度も語学学校に通いませんでした。その必要はないと高をくくっていたわけですが、後になってみると、初級文法以降の授業をフランス語圏ではどのように行っているのか、を知る上でも必要なことだったように思います。日常生活では、「習うより慣れる」式で身につけたフランス語で十分ですが、何が「正しいフランス語」として体系的に教えられているかを知ることは、あとの研究にも自分が教える立場になったときにも少なからず役に立っただろうに、と思われてならないのです。

以上、私が自分の体験を通して感じたことを書きました。語学習得方法も留学も人それぞれでしょうが、その参考になればと思います。 (塩田明子)

~ ~ ~ ~ ~

#### 留学について

留学に際して得られるタイトル・奨学金には、主に二種類あります。一つは政府系、つまりフランス、ベルギー、スイスの給費留学生になること。もう一つはロータリー財団をはじめとする各種民間団体の奨学金を獲得することです。前者に関しては各国大使館に問い合わせることで情報が得られます。詳細が突然変更される可能性があるので、前年度の要項はあてにしない方が無難かと思えます。後者については、大学の学生課などで募集要項を閲覧することができます。他大学の掲示板にも注意しておくともよいかもしれません。自分の大学に全ての募集要項が揃っているとは限らないからです。いずれにせよ、募集から留学するまで一年以上の間があくこともありますので、早めに行動をおこした方が何かと安心です。

フランス語学専攻だからといってフランスにこだわる必要は必ずしもなく、ベルギー、スイスやカナダへの留学も考慮に値すると思います。私自身ベルギーに留学していたことがあるのですが、様々な意味で貴重な経験になりました。ブリュッセル自由大学の教員にはM. WILMETやA. ENGLEBERTのような著名な研究者もいますし、お国柄というのか、方言研究の伝統もあります。確かにパリと比べると授業やコンフェランスは少なく活動の選択肢は限られますが、その代わり自分の勉強に専念する時間が多いと考えることもできます。要は与えられた(留学)環境を自分自身のためにどう利用するかでしょう。実際ブリュッセルからなら、もし必要ならパリをしばしば訪れ、場合によっては(例えば隔週の)ゼミを聴講することも不可能ではありません。パリ-ブリュッセル間は近頃、一番速い電車で二時間かからないのではないのでしょうか。

(川島浩一郎)

#### 編集後記

春木仁孝氏が昨年度『フランス語学研究』の編集責任をなさっていた関係で、ニューズレターの編集との兼任を避けるために私に話が回ってきました。元来この種の出版物は一度目を通すとそのまま引き出しの奥にしまいこんでしまうことが多く、例会の発表予定も今ではフランス語学会のホームページで見ることの方が普通になっているはず。むしろ他の出版物やウェブ上では目にしにくい情報を前面に出す、という考えに沿って数名の方から原稿を頂くことができました。特に若い研究者に向けて、経験のある程度積んできたもう少し上の世代の若手研究者からのアイディアの発信は今回の中心テーマになりました。元来の伝統的な情報の一部も残してはありますが、できるだけ顔の見える情報になるように心がけて見ました。

結果として過去のニューズレターと比べると抜けた情報が多くなりましたが、恐らくは2~3年に1度くらいの割合で再録していくべき内容のものが大半だろうと思います。この問題について、ご意見のある方は事務局の大阪大学(あて先は『フランス語学研究』奥付参照)、または直接川口宛(本ニューズレター「フランス言語学を一緒に勉強する会」参照)にお寄せください。

最後になりましたが、このニューズレターのレイアウトと版下作成を担当して下さった東郷雄二氏と、記事を執筆くださった方々に深くお礼を申し上げます。

(川口順二)

~ ~ ~ ~ ~

日本フランス語学ホームページ

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>

学会事務局のメールアドレス

flsアットマークfrench.lang.osaka-u.ac.jp

メーリングリスト frenchling の申し込み先

f-ling-adminアットマークfrench.lang.osaka-u.ac.jp